

岩手大学図書館旧宮崎文庫所蔵 『十和田山本地由来記』の翻刻(一)

家 井 美千子

岩手大学図書館に所蔵されている和書『十和田山本地由来記』は、もと宮崎求馬氏の収集による「宮崎文庫」に収められていたが、旧宮崎文庫の調査が進行中のためこれまでその存在が一般に知られず、当然その本文の内容も知られていなかった。

本稿では、『十和田山本地由来記』の概要を紹介するために、その前半部分(第一巻)を翻字したものを示すことにする。

なお、旧宮崎文庫所蔵『十和田山本地由来記』は全六十六丁(墨付き六十六丁)からなる一冊本である。第二丁表一行目に「才一卷」と記し、また第四十五丁裏一行めには「十和田山本地下巻」と記され、二つの部分からなっていると考えられる。このため、先に「才一卷」を翻刻し、次稿(二)において「下巻」を翻刻するとともに、本書全体の書誌的な性格について述べたい。

なお、後表紙に「明治十歳二月吉田改／小原甚作主」とあり、またその見返しに「天明五乙巳歳二月吉日 小原氏書之」と記されているが、書写事情や宮崎文庫の入手事情も不明であり、今後の調査が待たれる。

なお、翻刻に際しての留意事項は以下の通りである。
第一丁は料紙が左下にかけて大破しているため、その部分の本文が欠けている

(一オ)は第二丁表を、(一ウ)は第二丁裏をそれぞれ示す

一丁表裏の「……」は、料紙破損のための欠落を示す

判読不能の文字は「?」と示す

判読に疑問がある文字には、右に*を付す 例…○*

助詞や送り仮名として右に小字で記されていたものはポイントを下げて示す

もとの字を消した痕跡がある場合には、棒線「―」などで示す
傍線は原文に付されていた場合に、そのまま傍線を付して示した

原文の一行が翻刻本文一行に収まらない場合は次行につづけて示し、行終りを「／」で示した

・翻刻

(一オ)

十和田山本地由来記 才一卷

レイイセセシ^{セイオン}レイブソクシ^{コウシユ} 霊地是心之聖賢也 灵佛則心弘融也 抑十和田山飛

龍権現の由来を尋奉るに藤原……………

戸渡五郎左衛門とて有徳の仁あ……………

をなげき熊野権現へ……………

法華経一部胎内……………

と申ければ五郎左衛門……………

(一ウ)

おそしと待給ふ當る十……………

まへば玉を磨ける……………

名付ケ七歳ニ而永福……………
 す一字ヲきけ…十字と悟り……………
 及申あごんげごんほうとう般若十……………
 かう議なし十七歳の春の頃真言秘みつの奥儀を悟り……………
 あうんの二…あ……………とて眼大…に輝き熊之進もはや

（二オ）

嫁を取迎ゆいせきをゆつらん去れば七戸和野？兵庫殿娘お
 とよとてよからん頼而媒於兵庫殿へ右ノ次第申以兵庫
 悦幸かな祝言之儀ハ支度次第近々人諸為御知申さん
 媒喜ひ我家へ帰り五郎左衛門夫婦へ申述る家の執権四野
 崎八郎左衛門問一子八力ニ申渡祝言用意申尋夫より法印江
 願上御暇申請んとて御寺ヲさしてそ急右之次第法印へ申
 置御いとま下さるゝ熊之進一ト？？へりわれ出家になり衆生

（二ウ）

と我も成佛せんと学文に心ヲ盡し甲斐もなし父の仰：
 背きだんめつせんも不孝之仰に随ひば大願甲斐と成而諸佛
 神之罰を蒙り父母諸共地獄へださひせん事二度此世に生る
 難かるべし先法印へ御暇乞申上我家へ帰りける父母喜び祝言
 おそしと待給に扱亦兵庫殿分の御使としてしつけん伊達小
 野右門参上し祝言之儀ハ當月廿五日ニ娘遣り申さんと申来る寔に
 野邊地城代伊藤武膳かしつけん東嶽鬼右衛門問一子熊太郎申

（三オ）

召出シ和野村和田兵庫が娘當國一之美女と聞ク一子且弥
 妻合わせんと思ひしに五郎左衛門前被越無念也時に熊太郎
 進出事きわめたれはいんぎんらし事叶まじ某はせ参しうばイ取

参らん言鬼右門押とゝめたとへ縁組有とても君の御いかう二
 ハ及まじ知らぬ躰ニ而使ヲ以申請ん承知なき時大ぜいニ而理不尽
 うばい取ん此儀尤ト山田源吾ヲ使ニ立源吾案内乞てうち二
 小野右門不思議曰ふ主人の名代出源吾式礼終ハ兵庫

（三ウ）

申入るは娘申請度俸且弥妻合遺蹟をゆつりたかに縁組
 あり中むつましく仕度由申入に宜敷も仰上給れと云小野右門
 手けひ主人江申超もなしおとよ七崎村熊之進殿へけいやく仕
 候事究て不死成右之訳御邊一分トして武膳殿へ御返事慮
 外千万小野衛門主人病氣他行之砌ハ名代勤るハ家々の習ひ
 源吾腹ヲ立一文字に飛かゝるに小野右門しきりに首をつかんで末座に
 なけ出しをきあかる所ヲ正太郎刀からみに不がひなき肩に懸け

（四オ）

是家来共旦那の源吾とやらけちく虫とやら本所江供し帰れと
 門外へなけ出しくわん貫てうとしめければほふくの躰ニ而逃帰
 る武膳／
 聞召大きに腹ヲ立鬼右門父子斯ト仰ける源吾熊太郎につゝしめられ
 面目なふして我家帰る？而鬼右門てたておめらし祝言の其日？？も
 八違し則五郎左衛門分の迎としてたばかりいばいとらん又追分ニ
 熊太郎大将ニ而伏勢かくし至こと及ばつゝふみころさん姫の案？
 をは棄請取？此頃長あめにて天満川人馬通用なきと聞く此方ハ

（四ウ）

ならば舟みちん打くだき然は迹而之勢ハ及まじ武膳喜びひ
 其てだて宜斗べし扱五郎左衛門召て明日迎には押トして
 八力遣さなり供廻り美敷相心得べし扱熊之進無念なる祝言今

家ヲ立さらはほたいの本意はとぐるともめいる八万の戴合猶高
父ノ命に背くまつた佛に随ひハ生々の六親慕賊三？ハ？
のこうくにしつむべし父にや随わん佛任さん天不言地不語
心一つに定め兼天に向てちかいを立がつやらしにわか吹くる
夜？／

(五オ)

の波ハあやなし梅か、のいぎやう四方にさつくと光朋ハ百鍊
鏡にてらし木末よ梨びんつらゆふたる天童みめうの御聲
あざやかによき哉く熊之進大に世尊ハ父大王に背き三かい
教王とハ成給ふ汝ハ世尊久遠じん傳かくの昔はほんけは
御弟子の上首ニ而末法のゆるぐ迄も此大乘を苦痛せず
つよふ不ぞくを請し身で軽き事なき出家をとげ五？
の導師と成大法を弘めん心に心こうせん流布せん事佛

(五ウ)

もうごなし我ハ是明星天本地虚空蔵大菩薩明？に
祈する誠の心に感應し福智圓滿の宝珠をあたへんと
熊之進御袖になげ入給ひて御像明星天と現こくうに
輝見得給ふ若きみかんるい肝にめいし有難き身の上に
思ひバ父母の命に背き不孝の罪欠躰なしせて切し此
髪を形見と佛の教へ我念火たくのきつなは切たり共母
の胎内に宿りしゐんゑん我レ名につくが父母のかたみと

(六オ)

思ひ切り夜半に紛れて御寺ヲさしてぞ急る、法印おどろきな
がら喜び父母＊なげきハ尤なれ共一子出家すれば父母は
不及申二九族天ニ登る事遷の誓言疑なし則じゆもん

をさづけ四方浄土と剃落し御名ヲ南蔵坊と付給ふ五郎左衛門
たくにてハ熊之進見得させ給バぬとてい篠崎八郎左衛門納戸を
尋るに黒髪もとどり切り差添共に置れたり南無三方ト
取上テ五郎左衛門ニ為見ければどうてんしたまもふげし

(六ウ)

一念の子出家し家めつぼう今一度對面に及度と御寺をさして
いそぎ行法印へ御對面右之段申上る法印聞召し尤もなれ共宿縁
なれば力なしそれく南蔵召せとの給ひば熊之進昼の姿と
打変り黒染の衣にのりのけさ御手に菩提の数珠を取
すくくと出給ふ母上いかに仏になればとて父母ニ茂罪をかけ
？程ゆ、しき遺蹟をたれにゆづらん浅ましや如何に佛の
つげなれば我子を返し給ふはれとなみだにくれておはします(注記)

注記・抹消した右に「もだへこがれてなげがる、」とあり

(七オ)

南蔵坊とごうの言葉なくなみたにくれておわします法印夫婦のなげ
き尤也乍去思ひ立たる法の道かへせばあびだんじやうの地獄に
おち諸仏神のにらみを請五十六億七世の万罪千代の時迄
夜に三度昼三度其身ハめう火に焼れ其くるしきいか斗
此世はわづかの夢の内出家成就するならバねはんの岸
棹さしてくぜいの舟にのり＊得て菩提の本願うたがひ
なし苦敷罪をまぬがれて一つは川瀬の蓮臺に成佛あ

(七ウ)

れとぎやうげ有こそ有難けれ夫婦あつと感心して礼拝有り
有難しくと思ひ切南蔵事は偏に頼奉るとなぐく我家
い帰りけるしつけん八郎左衛門口惜しや嫁を取テも聾ハなし兵庫

か家臣伊達斧右門今稀成くせ者押として参べし
何と言訳せんともくねんとしてひかへたり扱七戸和田兵庫へ
ハ野辺地城代武膳分迎の乗物さゝめき入るストハしらず夫、
の引手物取出し兵庫小野右門召して正太郎をば 千引

（八才）

大明神にもふし子故婚礼の御知らせ代参に遣したり其方
押として向佛には茨木龍左衛門参べし扱此度の迎には八郎左衛門
父子之内可参ト存しに以之外の仕方也とおとよをこしにのせ
急は程なく追分に出る姫の輿東をさしてぞ過て行龍左衛門
いかりをなしたがいかくせくと呼ゆる所にかねてかくれゐた
る大勢と

きをつつて切てかざる龍左衛門馬より飛ており大太刀ぬき大勢中に
割て入る火花をちらし戦ひば皆わつと逃ける野辺地武膳

（八ウ）

ケ家臣熊太郎是を見て四尺八寸真向に差かざし七戸和田の
家臣龍左衛門を討ニける——和田の執権小野右門熊太郎
討けるはや姫の輿をうばわれたりいまだ遠くへは行まじと
駒ニ打乗いつさんにかけて行程なく天満川に着ける船は
なきかと呼はれバ所、の者はせ来り先程大勢ニ而乗越し向のき
しに而舟をみちに打くだき足をはやめてかけて行ト語けり
小野右門馬より飛ており無念や口をしや己鬼右門め我

（九才）

性を変て安穩にハ置まじわれ一念之大蛇にならんと川
端江つと立腹十文字ニかき切太刀をくわへてだんふと入と見得
しか忽二十尋の大蛇となり黒雲稲妻 * 神四方の山な

り谷響震動雷電大風ニテ古木吹折山家そう木しんどうし
蹟を慕て追かくるハすざまじかりける次第也かゝる所正太郎代参
勤歸りしが此有様を見てこはすざまじき次第也神慮のとがめ
か——亦是蛇身鬼神のわざなるかと太刀に手を懸黒雲

（九ウ）

はつたとにらみふんぢける雲中より大蛇いかに正太郎我は
汝が父小野右門ケ様くの次第ニ而我性をかへて追かくる汝ハ屋形
へ早く
歸り七崎分の迎の者共参べしそげく正太郎あつと答て我家へ
歸り兵庫夫婦へ始終を具に語りける家内一度にわつとなげぎける
かざる所に篠崎八力御迎として参上ト申上ル是ハくいかせん
とさわぎける正太郎ずんと立騒な鎮れく而さわかば皆ころさ
んと
其身ハ装束改座敷に出互に式礼事終われハ八力手を遣ひ

（十才）

主人申入候ハ嫁御迎として八力打越申候御よめ御渡取度よ覚
も仰上べしといんぎんにのべにける正太郎 如 仰今日迄支度日限
を言
しと待所に昼頃病氣かんねつ以之外甚敷残念之至り唯今
飛脚を以道迄為知申さんと存候所に貴殿に面談之上とかく
快氣次第二三日中に此方より送り進上て申其段御主人に宜被仰上
べしとそれく引手物相出しければ八力暇申て歸りける扱屋形
江歸り父八郎左衛門に右之段申ける八力いかに汝迎に出し其夜熊之
進殿

(十ウ)

出家被致たり姫有ても聲ムコハなしいか、せんと語りける扱亦小野右門一念の大蛇大蛇程なく追詰雲間よりむつと出たる有様身の毛もよだつ斗也朝日ノ様なる眼輝カヤキし大地もくづる、大音ニ而ヤテ鬼右門なんじにたばかられ一生の不覚一念の大蛇と成り今に思ひ知らせんとほのふを吹懸がいつかみ二つにさつと引さいて残りし者共此ほのふにさわり老人も不残おとよの姫斗籠の内ににおわします小野右門御迎ニ参ルと乗物ひつからげ黒雲に打乗り屋形ヲさして

(十一オ)

帰り座敷にそつと直し置く兵庫此の由御覽じて大ニ喜ひ扱く姫つ、がなくごぶん性をかへしと正太郎申せしハさもななくうれし？其時小野右門一生の不覚かくりながら乍去姫君うばい返せしを不便の者と思ひ誠に主に忠孝義心之二字大しやく天に通ひけん明神罷成我が住所ハ天満館村明神と現じお家を永く守らん如何に正太郎よぎに奉公致べしと汝ひき引替たちまち旗ハタ尋斗の大蛇となり黒雲に打乗り天満館天満明神とあらわれ給ふ今にれひくと
(六行目注記)から>の右に「親子の別れさらばと」「姿を」とあり

(十一ウ)

して御宮有り扱正太郎祝言催し先達而飛脚を立同勢あまた召具して七崎村へ急ギ乗物力き寄る押オサヘとして伊達正太郎参上ト陳ればそれ此方コナタへと一ト間へせうし御嫁ハ納戸へ聲ハないうわむき喜び内はうれい八郎左衛門一生の不じん當也と思案の二字ヲ究め随分御ちそう申せと斯て八郎左衛門やふくと座敷ニ出テたかに式礼ノ

終り正太郎しやく取直し主人申入候ハ一昨日長く御迎ひ姫病氣故延引真平御用捨被下べし快氣ニ付今日送り進上申也此の儀

(十二オ)

宜被仰上？とあんぎんに述にける八郎左衛門委細承知主人の大悦ノ

我ら迄喜候とたかに盃終り八郎左衛門肩衣取ておしはだぬぎ九寸五分ノ

右手のあばらへかつばと立左手へきりくと引廻し嫁入りても聲ハなし熊之進元来出家願ひ深くして度々願候江共漸々留置たりしが三日以前に出家に成りはや南蔵坊と改名有り進てものといても俗にはならじとおもひ切家の滅亡此時也我腹ヲ切兵庫殿へ言訊せん万事を鎮んハ家臣役使ニ立たる貴殿にもハか首進上致かな

(十二ウ)

ちちよくも不是在間敷鬼もあさむく正太郎涙ヲなかし如何に義心なれはとて見ごろしにする口惜し首かき落し正太郎江渡ス正太郎受取八力方へ渡ス姫君に斯ト申上れはうらめしき次第哉とノ

なくく輿に乗り本所をさして帰りける此人々の有様勇あり義有誠あり義心の二字を傳へける

二段目

扱慶鉢法印我弟子数多持といへ共此寺を継べき者ハなし

(十三オ)

幸かな南蔵に寺を譲らん南蔵召て和僧に此寺ゆつる也大法秘法傳んと既に立んとし給ひば兄弟子順會飛出て南蔵

ニ此寺ヲ渡ス事おろか也と様々悪口申ける法印正法を妨げんとす惡僧此寺退山せよと仰せける順會腹を立口惜き次第哉とかく宝物盗み出し賣代なし一生楽くと暮さんとおと、弟子招きしんゑん坊がノ

手の長キハこんな時の重宝一心坊ハ勢のちいさはあなをくゝる
ハ用／

に立源角坊ハ勢高く頭かちなる人をおどすによからん手傳頼

（十二ウ）

と宝物蔵ニ入つゝ、取出し金のうか巻絵弘法大師御眞筆眞
言秘蜜の一軸四人一所に頭を寄せいかに源角坊賣物値踏ハ捨
ても五百両先虫喰にても有やらんと開て見れば大日如來の懸物
大津で十四五両の繪也是ハと側なる箱の名書は慈覺大師とう
？？大師地嶽山に御山之時此の寺に御立寄其時住僧御心に叶
是を譲り第一之寶物捨賣しても式百兩ト蓋取袋より取出し
見れば竹のたんすき餘りとうとひ物ゆへに化させ給ふかと傍

（十四オ）

なる箱の名書はしつほうしやうごんの御数珠同皆水晶の数珠
是ハ七百両が物拵有順會見て是ハ大事にばけさせ給ふなど手を
合せあびらうんけそわかとふた取見れば高野にて廿四五匁の数珠
是ハと刀落し居たる所をすんと立て口おしき次第也是と云も南蔵
めが成事とく野辺地城代武膳殿へ門談し思ひ知らせんと衣
まくつてかけて行此三つの寶物盛岡永福寺へ納り今に有り
順會程なく武膳の屋形へ着き案内乞て愚僧は七崎村

（十四ウ）

永福寺しよけ二而御座候御面談申上度罷越候御取次頼入と
申武膳不思議也遠路何共心得先方へとせうじける順會愚僧
参義ハ南蔵事様々悪事致候故師匠江此暇申上候得ハ却而
某かんど致され寺を追ひ出され候内々兵庫殿も熊之進と縁切
候得ば姫貴公に進度思ひ被居候得共南蔵方おとよへ一の

取りかわし御座得は被延引被居るそうに承る此頃聞ハおとよ
南蔵を恋こかれ屋形を忍び出るときく兎角南蔵付て

（十五オ）

すて候ハ、御縁組は安かるべし此儀然べしと申ける武膳大きに
喜び家の子鰐淵六郎に斯ト仰ける六郎扱ハ左様の若君某
にうばいとれと被仰幸かな御坊御案内給れ客僧其姿ニ而成まじ
と大小おし上編笠まぶかにひつこうで且弥三人一所に出けるが
不出来成りける次第也扱又和野村兵庫が娘おとよの姫熊之進
との事明暮思ひ願ひ責而出家の顔成共一ト日逢て恋路の
やもふはらさんとめのと壱人召連て夜半ニ紛て出らるこひし

（十五ウ）

き人に相坂や渡りの舟に乗りを得て嶋ハなけれと藤嶋村次は
名をのみきし傳法寺右手にはるか觀世音女人成佛御佛や
それハ来世自ハ現世の願ひ守らせ給ひとふし拝み夫々谷を越
峯を越へつかれはてたる有様ニ而しばし休らひおはしますかゝる所に
三人者共方々尋迎り来り此人ニ此有様をみてあれ正鋪おとよ
にあらん愚僧寄て語り落し見んと女郎衆何方々何方御通り
と成らハ姫君きこし召し我らハ五戸之者なるか觀音参詣に

（十六オ）

参りたりいやくさにハ有まじ某ハ七崎村永福寺の味噌すり坊主
南蔵様おとよの姫武膳にうばわれ夫を無念に出家成られ共
今だ念がきれすゆへ尋合せて給へと仰ニよつて方々尋しか共見當り
不申しや代の人にましまさば南蔵さまへ御供申さんと編笠
取て誠にぐたばかりけるおとよそれはまことかうれしや自ハ
おとよなり且弥六郎すこゝと立寄我ハ且弥也熊之進事ハ思ひ切て

我と夫婦になり二葉の松の末かけて千代そと榮へ申さんと聞ハ

(十六ウ)

おとよ大きにどうてんし袖を引放したはがれたの浅間し且弥といへる名もいやじや六郎おふといへば且弥様の奥様さやいやといは脇にさへた大？様のどぶへとらすハ合点か如何に從ふ事ハ
叶わん也西向て手ヲ合せのふいかに南蔵さま出家？？まし／＼て今のくるしすくひ給へ父母恋しやはハ今生の暇乞じせいの哥

恋しさにたつねきたの、かいもなくあわでぞ
かへるあじのこすへ南無あみた佛弥陀佛

(十七オ)

とさいごを待こそあわれなり且弥此由見てせめて我手に懸てころさんとおとよめのもとさしころし夫より七崎へ立越南蔵を討てすてんとかけ行けハ南蔵観音日参の由かたわらにかくれて居て下向待ん下向になれば三人進テ行南蔵天向て合掌しておわし
ます且弥和僧故に我恋叶わんとてうとうてば太刀は三つにおれにけるし／＼たん／＼ゑい観世音智力之有難けれ四野崎八力忠宗は是も観音参詣此の由聞きていさんにかかり且弥も六郎も順會三人

(十七ウ)

討テすて夫ハ南蔵坊ノ御供して御寺をさしてゆふ／＼と入給ふいとなまめあたる女房御側にする／＼と立寄なみたにくれて居たりける南蔵坊驚きなんじ何所々来れるそはや帰れ彼の女うらめしの
仰哉思ひこめたるよめ入を一夜枕をならべすしてかへし出家となり其うらみいか斗有にあらは屋形を出て旅の空命の内にかくと
斗の御情これをかたみと菩提に入らんと思ひしに尋きたの、かいもなくよしなきもの、手にかゝり其時のくるしみは君にうらみはや

(十八オ)

るせなし姿は土中にさらし置是も誰故あらうらめしの帰れとや帰るましとする／＼と立寄御そは二すがりつく南蔵はつとおとろき引はなし逃給ふあたうらめしと？にあいきやくのしんの角はひて髪ハ／

みだれさかたつてしもくを以テおとり出刃のくるしみ誰ゆへそ今に思ひ／

しらせんしもくをふつて立たりける八力次之間に有けるが太刀抜飛出おんりやうと戦ひけるおんりやう討ても切ても手にとまらずかゝる所に法印御覽じて汝ハたいなくして何を以てちきらんおんりやう

(十八ウ)

南蔵取ころさん同じくうきとなしなき来世でちぎらんさあらはきとくを見せんとないばくげばくのめんをむすんでかけいらたか数珠おしもんで東方にはこんさんせひ南方ニはぐんたりやしや明王西方ニは大きく明王北方にはこんかうやしや明王中王ニは大日大乗不動明王のふまくさまんだばさうたせんどうまかるしやだくそわかうんたたらたかんまんとせめに責て祈けるいのりのいられあらむくるしとかつはとふす南蔵是に力を得汝色心をさとれ

(十九オ)

即佛心に至ると寶珠をおんりやうにさ、げ給へば光明うつると見得しがたちまちにしんみの角取一度にはらりと落到ける
其時おんりやう手ヲ合有難し／＼尊き僧の法力にて仏果をゑん事疑なしと影もかたちもなかりける

三段目

何とぞして此姿に衆生の願ひみてんか為みろく出世に待んものと思ひ立こそふしぎなり此事明星天はいのらん

（十九ウ）

一心不乱にいのらる、有夜の事なるにいぎやうくんじて花ふり下り
 五色雲たなびき明星天童子と現じ善哉く、汝が大願成就せり
 去ながら難行苦行けの行功積て有ならは汝か住山定べし
 先熊野権現に三十三度の願をかけべしなんじにゆづりし宝珠
 のちからを加へて大願成就せよと行末猶守らんと光りをはなつて
 こくうにあからせ給ひける御あとと三度ふしおがみ夫台師匠法印へ
 行脚の願ひ付に熊野権現に参詣仕度御暇たび給ひと申

（二十オ）

上ル法印聞召しあんきやハ出家ノ行尤ニハ候得共我隠居せんと思ひ
 しに以之外乍居と、めんには出家の行法破る、也？三年御暇
 下さる、三拜九拜さらばくくと立出其の屋形に入父母に對面御暇乞
 申上るに母上ハ出家ましくとても近き所におわすれば力なりと、
 まり／

給ひ南蔵坊聞召実にととの候うつよ玉八万歳東方作八九千歳
 我朝ニ而ハ浦嶋太郎七百歳あるといへとも名のみ聞て目にハ
 見ず天人の五すひ人間に八苦誰かまのがれん前佛たそれ

（二十ウ）

情仏たびいまた世に出たまはず二佛のちうけんむやくたり
 といへともほんのふもうぞうの雲にさそれ三途八願の願にさいぎし
 く事はほうぎやくぶじんとや申さん世は夢
 の内とかたらへ給ひば夫婦ほつきしてさらばくの一首

恋しさにあとをおくらの紅葉ばに
 また秋たらぬ鹿はなくな

南蔵坊聞召シ

のりを得て見れば白雲あらはこそ

詠し給ひて別れゆくこそしゆしやう也

（二十一オ）

寔に又八之太郎之由来を尋ぬるに八戸ノ片原に十日市ト申所
 に有徳の仁有男女の子共多き中におふじとて類稀なる
 美女なるに有夜さもいつくしきしやくじんつま戸の暇にた、
 ずみ給ふおふじとの君故にこれこかる、あまを舟一夜かこと
 のかしまくらほのめき渡る其どばをあげさせ給へおふじとの
 きくふもこはみつからこときのしつめに何の心のありそうふうみつ
 かいもおよばんあら磯につかせて帰れ？のとしやうじん

（二十一ウ）

聞召しうらめしのことの葉や思ひかけはし慕ひ来てまた
 里なれぬ鶯のつほみの花になれそわづ花にあらしともふ
 そうや君に身はしつかへそこのみくつとならばなれかこと斗
 里の御なさけかりきぬ内はあかしの淵に入る、共かへるまじきの
 穂に出て末の松山波越せばこせとつま戸を明て御手を取一ト
 間にせうじ給ひける月日重り今ハはや懐胎になり給ふしやう
 じん有夜のふいかに我妻よきのふけふとハ思ひ共春過復

（二十二オ）

立秋つきかた古郷なつかしく思ふ也くわいたひの子誕生ならは定テ
 男子名をば八之太郎ト付てたべ我か住所は八太郎崎又もや参らん
 さらバイとまと仰せけるおふじきくよりもみつから捨て何国へ御出
 はなしハやらぬ君故に浮名取身ハ虎臥野辺の奥迄も
 友につれさせ給へやとくときこがる、道理也しやうじん御身
 つれ行ん事却而いとしき事也此上ハはつかしながら斯る姿を
 見給ひとたちまちはたひろの大蛇となり黒雲に打乗り八太郎

(二十二ウ)

沼二入けるおふじハ大キにどうでんし産月おそしと待けるハおそろし
けれ當ル十月には安々と平産したりける奥歯前歯がんと
かみ眼をくわつと見開ひ而おとり出たる有様ハ只者ならすおそ
ろしくもそだてける光陰矢の如くはや十七歳に成其長八尺
五寸眼の光り朝日の如しはう骨あれて左右の髪さかたつて力
ハ奥しれす為に好ハ獅子熊取つて引きさいて木をこり山遠好
の近郷之者ハ申様八ノ太郎殿我々毎年言分山に渡世の級

(二十三オ)

はぎに参也熊のし、おふくしておそろしく候得ば我々に同道して
参られよと八之太郎喜びさらば参り申さんと三人打つれいそぎける
山ニなれば小屋にしばしやすらい居たり頓て山にわけ入ル八之太郎居
たる所をすんと立猪は有やとかけめくる所に右手の沢つたへ
二疋つれて登を見て飛てかゝるし、をかゝるかみ岩ほに打つてか
らだ
みちに打くだき左右にかいつかみ晩の料理にして友達にく
わせんと小屋へ帰る友ミし共山分歸り是ハ八之太郎殿御働料理

(二十三ウ)

して給申さんとよろこびける八ノたらとの明日は貴殿の飯番の心得
たり
さて明日もし、とり皮はぎ本国にみやけんにせんと夜の明るを遅し
と

待けるあくれば頓而大山ヲかけめぐる見渡せば壹丈余りの熊三疋
あれでぞかけ来り八之太郎見てあまさじと飛かゝる小首をつかん
てなげ出ス二疋之獅子すきをあらせず飛かゝるつかまんとすれば
かゝる、り左右をはらゐばなげたる獅子むつくとおき向さまに飛

かゝる／

ねちりころさんとすれハ手之内分ひらりとぬけだがいにあら

(二十四オ)

そふ其いきほい山も崩る斗也さすがの八之太郎大あらわに成り
猪、も
今はたゝらやたらにつかれ岩ほに腰を懸溜息ほつとつきたるハ
ふいごをふくが如く也時二此獅々からくゝとわらい其分の勇力ニ而
ハ我く／

に及まじ力を入ニ明日参られよと云かと思ひば行方不知うせに
ける八ノ太郎大ニいかりをなし無念口惜しや獅子ハおゐて山家を
めくる鬼女成共取ひしがんと思ひしに無念也我性をかいても
あまさんものをと天に向てさけふ声しつ海よつ海むしき海迄も響

(二十四ウ)

音べし地はこんりん那邊のそこしきそう名におわします大
龍王に通じけんと齒かみをなし実に今日約束の飯炊番
先けとへ帰らんと飛かことくに帰り水を汲んと桶柄杓を手に取ある
し川にて水を汲見れば？などいへる肴鱸をひろげて飛廻り是ハ
仕合我等も三人肴も三疋今日は熊とらず仕合わるし？の手からみや
げにせんとさらい取小屋に帰り先肴を焼かんと飯なべかけ肴のには
にふんく／
としてとふもいわずこたへられず先壹疋しや？せんと其味ひ

(二十五オ)

かんろのことしほうばい共ニもくわせんと思ひしにかにんならず
二人ニ壹疋
宛くわせんとしよくしける食に随へ其あぢわゐ五胎ニしみ渡り猶

二止事／

を得ず又壹正食しけるくふといなやのどかわぎ件の水吞ほして
 汲上ケ吞程に／＼こたへらず右之しづに飛行柄杓を以汲立／＼吞
 けるが猶／＼のどかわくゆへ今ハはやしづに喰付吞ける程に纔の
 しづはや拾四五間に堀り崩れ益のどかわき故右之しづにたんぶと
 入り吞む程に／＼ハヤ四五拾間に廣くなり岸打浪へはゞたをた、き

(二十五ウ)

ひろくなり霊／＼たる有様すさまじかりけり次第也二人者山々下り
 見れハハノ太郎も居らず待かね件のしづに行見ればすさまじきや
 まん／＼たる池と成ル也こわ不思議なりと見る所にハノ太郎ぬつと
 出やあ／

ほうはいともケ様之次第にて我此山主となる今宵の内に此山を立され
 古郷へ帰にならばおうぢや母に知らせ而暮よいそぎ高き所の木際
 ニ而我働を見て古郷へ帰り物語にせよと申ける二人扱ハ左様かぜひな
 しさらばと取ものも取あへず山路を社は出にける 暫やすらゐ

(二十六オ)

居たりけるすさまじきやハノ太郎其丈拾丈余りの大蛇と成眼ハ
 百蓮の鏡ことし角は深山古木に同じ紅の舌を巻上ケほつとつゐたる
 其息火煙と成て四方の山鳴谷ひゞき震動雷電して地分めう火
 燃上り一さんに焼上りハノ太郎おんどりくるふと見へしが鳴神ノ如く
 にてしんどうす稲光りしやぢくのあめを流し夜三夜三日か其
 内に海まん／＼たる渦と成武拾丈に關所を据たるハ今の大瀧是也
 ける二人者は不思議なりけるとやあらおそろしやと

(二十六ウ)

本国さして帰りける

四段目

扱も且弥うたれし事四方にかくれなき武膳大きに腹ヲ立三度
 ふかく取杖や柱と頼し壺人子を討れ何を便になからゑん南蔵坊
 めか修行に出ると聞何国迄も追懸我子之敵討て捨てんと家の子
 関屋九良石見の五藤太打連出にける又篠崎八力忠宗
 南蔵坊様熊野権現江御大願有テ御参詣仕らんと旅

(二十七オ)

の装束かため出ゆく

南蔵坊熊野笠道行

南蔵坊と有所に宿を借り夫々も毎日権現に参詣有り日数積
 りて札拝を奉り夫々南智山さして急る、右手ハ高き御山藍染明
 王伏拝み濱の宮に着給ふ実に札樂世界ハ非人等ニ至迄成佛の
 願を満ん觀世音心しづかにふしおがみ右手ハ川ニ左手ハ海親しらず
 子しらず難水を打過て那チノ山に入給ふ実に日本一之觀世音我カ大

(二十七ウ)

願成就なさしめ給ひと御祈誓有ル瀧壺に下らせ給ひ見あぐ
 れハ拾五丈の瀧の水岩にせかれて糸のことし実に白糸瀧とハ
 理也三国一之瀧やと三十三度だんぢきにて行法ある夫々屋ぐら山
 に指懸りあまたの難所ヲ打越へて本宮へ着給ふ本殿になれハ札拝
 奉と有所へ座を組でだんぢき毎日法華經誦誦なされ日数積
 て三十日と申には権現 顕れ出給ひ善哉／＼汝が大願 疑なしと
 杖と草鞋御さづけ此わらんじのきる、所ハ汝が住山成べし行末

(二十八オ)

猶も守らんと光りをはなつてみてらの内に入給ふ有難し／＼と御跡
 三度ふし拝ミ夫々高野山を心懸たなへ越に指懸り急は程なく高

野山どうくゝゐんヲ臥^{ふし}拜^{がみ}麓^{もと}に下らせ給ふかゝる所に六尺余の大山
伏^ふ柿^{かき}の／

衣に大太刀はき金剛杖^{こんどうじょう}を横たへてあたりをはらつて来りヤア修行
ハ法師のわざと聞修行成就^{きんじゆう}致^{いた}しての徳ハいかに南蔵聞召^{なんざうもんしやう}しても
おるかやその三界の大導師^{だいだうし}釈迦牟尼^{しやくかむに}如来と申もそもあらせん
につかへてゑ三千浄土と説給ふ貴僧^{きそう}扱^{さく}ハ修行をとけ如何なる佛の

(二十八ウ)

道をうる山伏^{さんぷく}聞^き我々が行と申ハそも大峯かつらぎさんふせん
山々谷々^{さんざん}行^{おこな}すまし行力^{ぎやく}尊^{たつと}き印^{しる}ニハ飛鳥も祈^{いの}落し死たる者
もよみがへす御坊の法力と行くらべ致さん南蔵無由聞召^{なんざうむゆうもんしやう}し其

印見せ給ひと申山伏法ヲ結んで颯^{さつ}とかくるたちまち火多んもへ上り南
蔵少もおどろかすしやすいのゐんを結てかけ合掌あれば火煙失たり
山伏猶奇特^{しやうぎとく}を見せんと小高所^{せうかうじよ}にかけ上りいらだかに数珠おしもんで
先ッ神卸^{かみおろ}ハしたりけん一番に鞍馬山の太天狗愛宕山の太郎坊

(二十九オ)

大峯かつらぎさんふせん筑紫^{つくし}柚^ゆが嶽^{たけ}かまん天狗にしやまん天狗筑紫
彦三^{ひこさん}ぐぜん坊箱根山に霧太郎遠州秋葉の三尺坊三川にハツ指^{ゆび}
蓬菜^{ほうさい}坊小田原さいじやうとふりやう権現^{こんげん}榛名山には鉄五郎妙儀山の
杉本坊あんば大杉大雲坊出羽に羽黒の三占坊奥州岩鷲^{いさづ}山に
かくしなき源まく坊中ニも頼奉る大峯山に多んの行者^{ぎやう}前鬼^{ぜんき}後鬼^{ごき}
唯今じんべん不思議を見せしめ給ひと責^{せめ}にせめてぞいのりけるあら
ふし／

ぎや四方の山明答^{しんめい}ひしき震動雷電^{しんどうらいでん}夥^{おほ}しくゆきまんくゝとふり積

(二十九ウ)

山々谷々おしなめて皆白たへにぞなる其時異類異形の姿のもの

あらわれ出どつと笑^{わら}て雪の下なる修行じやいかにくゝと申ける其
時南^{なん}／

蔵雪の下ふづつと出真言秘密^{ひみつ}のくちを切て進^{すす}天清浄地清^{てんしやうじやう}

浄六根^{じやうろくこん}せうくゝ被^ひひ給ひと御杖^{ごじやう}をいてくぐうに向てはらい給ひばみ

どりの／

空と消てゆくさし物大雪蹟^{おほき}も形もなかりけり其時山伏手を含有
難しく刃のけんじや法力^{りき}ニ而さんねつの苦をたつかりミねくゝ出
世のあか／

月迄我レ守護神と成り申さん居網^{いづ}の権現是也と光り

(三十オ)

はなつてくぐうにあからせ給ひける南蔵坊の法力尊かりける次第也
夫々^{みな}奈良の大佛殿心掛鬼の中山に指かゝり心しつかに下らるゝ是は
扱置武膳主^{しうく}從^{しやう}三人ハ方々尋廻り高野山を心懸ケ来りし今南蔵を
見るよりも尋るまやス坊主めと呼ハればヲ、愚人に向ふ刃^{やば}なしう
らみあ／

らば心^{こゝろ}忤^{いた}に被致^{いたされ}よと寶珠をむねにあて合掌^{がっしやう}しておはします武
膳聞て我が子の敵と太刀するりとぬきてうとうてば太刀ハ三本におれ
たりすべき様もなし時に五藤太繩ヲ懸本國へ引んと高手小手に

(三十ウ)

いましめたりかゝる所江六尺余高之男かけ来り五藤太をかいつかみ
七八間^{ひちやう}投出し南蔵圍^{かゝう}て仁王立に立たりけりおのれとほとくる繩の
端光明はなつておはします武膳腹ヲ立うぬめが何国のごまの

はい子細有を引立るをがんどつとハ何事ぞかんにんせんと太刀に手を
かくる其時彼者一寸出會^いの料理^{あひ}ぶあんなばい御免武膳腹^{ごめんぶだんはら}を立

宿なしの雲助め其坊主渡さんにおゐてハあたまから切てはらひて
ざくく汁にせん彼はからくゝと打笑ひこわい事くゝ己は悪心持置て

（三十一オ）

人のくま取る？屋形洪柿染の大悪人伊藤宙字染かへて内藤無地にしてくれん武膳聞ておのれが様子しつた者其時編笠（なむら）なくなり捨しつた共（とも）四野崎八力忠宗也と武膳主従三人一々かうべをはね夫南蔵坊ハ八力ともないて大佛殿にいそかる、

五段目

扱大佛殿を伏拝ミ夫々春日ノ宮礼拝奉御坂ニ下らせ給ひ如何にハ八力我ハ是今大和路へ指懸り日本廻国此草鞋（わらじ）さる、所ハ我カ住山

（三十一ウ）

なり汝（なんじ）は国本江歸り父母に此由申上我故におふくの人を亡たり百人の僧を請待師匠法印導師としてせんほうせがき成佛得達（はつらい）の供養すべしと八力に御暇（ごひま）給り夫々南蔵大和路ト立別れ（たてわかれ）霊社（れいしゃ）佛ふしおかみ駿河（しる）の国に二十二社伏拝おきつ白波（なみ）さつた山聞しにまさる大山坂の難所はびくころばしやぎり坂右手ハかゝたる鳥も通ハぬ嶮山（けんざん）左手ハ田子の浦心しつかにあがる、右手左手を見給へて此年の凶年に往來の夜盗人におかされて手負死人数不知

（三十二オ）

不便の者とゑかうをさづけてあがる、山賊共南蔵を見て夫なる坊主裸（はだか）に成て通れ南蔵聞召し難行苦行に叶なば違背ハ不申去衣（ころも）斗ハ給れ山ぞくそれはやろふ心得たりとぬぎすて通らせ給ふ頃ハ十月／

下旬みぞれまぢり大雨はたゑをさす事刃の如しかゝる所に六尺余高の大山伏金剛杖（こんかうぼうじょう）を横たへて来り山ぞく見て貰ひ溜（ため）たるもの共此方へ渡せ山伏聞て盗溜（たうりゅう）而あそふハ給われ山ぞく聞にそいやつた衣裳ハ不申二及洞（ほら）の具共迄渡せ山伏此闇に御免山賊聞てそれ命を取れ山伏

（三十二ウ）

三丈斗（さんさう）のびあがり二十三人之者共一ツ枕に岩角におし付にくゑやつばらだ多くの人を害し国の騒助（さわすけ）置てハ後の邪魔（じゃま）不便（びへん）ながらもくわんねんぜよとかいつかみ海江（かいかう）だんぶくと投（な）こみ南蔵坊へぬしやうを／

参せ山伏それがしいかなるものと思召兼而契約仕江いつなの権現也猶行（なほ）／

末守（すゑまもり）らんと光をはなつてこくうにあからせ給ふ南蔵坊御蹟（あと）三度ふし拝（を）ミ／

夫々野坂村に御一宿夫々霊社灵佛ふし拝ミ夫々土佐国野根村に着給ふ日も暮其村之長者四郎三郎が家に立寄一夜之宿との給ひバ

（三十三オ）

亭主立出宿ハ成り申さん南蔵坊はや日も暮一夜明させ給ひやト女房立出聞訊もなき旅僧じや御身之様に破れ衣何をあてめに宿かさんはやう帰れと追出す南蔵坊すごとと帰られ給ふ所に立寄一夜ノ宿ト

の給ひば夫婦立出見ぐるしく候得共旅の勞（つう）をはらさせ給ひとせうじける／

夫婦座敷に出種々に食應し御僧は何国今御出愚僧ハ奥州南部也の諸国行脚致候亭主夫二付此向野根坂ト申ハ日本一の大坂登り四十里下り四十里峠（とうげ）に御番所有といへ共いのし、おふがみ多くして人ヲなや／

（三十三ウ）

ます中だんのがんぐつに其丈五尺余の山犬往來之者を取くらひ往來砌ト留り海邊通らんとすれ共はね石飛石ごろく石親子しらず大難所浪（なみ）に打れて死する者数を不知土佐守聞召し其丈五尺余り大

大退治致べしと大将に沢村平六藩被仰付百騎の勢にて野根村
かけ上り八方の声を懸け取巻んといふ共犬ノ形ヲ見得ざれば然ル所
ニ大キ成ノ

岩穴あり穴ノ口へ柴薪積重焼こめたり件の犬是を見てしんどう
らいでんして山をうがつておとり出かの犬はいだけ高にのびあがり

(三十四オ)

我をばいかる者とおもふらん大唐ゆるまん国の大将強力はつかんと
いふ者ノ

也日本に打渡り切支丹に傾んとせし所ニ土佐守の郎等本田野右門
宗綱ノ

と云者とうたれ其霊こん無念はれやらすぼんのふの犬と也おのれハ
おゐノ

て土佐一國を喰ごろさんとおもふ也平六兵衛かせどを廻し弓矢鉄
砲ニ而むかふノ

たり太刀も弓矢もみぢんに碎てたゞずして大将平六兵衛共ニくひ
ひしがれノ

是に付人の往来も留りけり大なるそうどう也御僧是に五六日逗留
ましませと半時斗語りける南蔵聞召しおふくの人亡し事不便哉

(三十四ウ)

衆生の為に我其犬退治せん亭主愚なる仰かな大勢にて及ばぬ犬
何として退治し給ふぞやそれせつせんどうじうへたる虎に身をあたへ

給ふ我も衆生の為に其犬に我身を任せん貴殿も参りて見られよ
と野根坂に上りける南蔵坊中段にあからせ給ひ四方の気色を詠めお

わします所に彼の犬穴分出つとほゐたる其こへハ山家もひゝきす
ぎ留ノ

じき眼ハ月日の如に見開ひて牙をならしていがいみ寄既に危く見

えける汝が悪心汝を見而ぼんのふそくぼだいしん南無明星天と

(三十五オ)

現参し御杖を以てうと打給ひば忽はつ貴となり紺色玉こ
くうにあがり有難や刃のけんじや法力ニ而畜生道をまのがれて成佛

いたし本国に帰る也雲の内にそ入にける亭主有難やとふし拝み
かんるい肝にめいじたり通之者は聞おがむやら喜やらざゝめき
渡るノ

有様ハたつとかりける次第也亭主頓而御供申我家へ帰る近国他国

の者此由聞而もさらば参りおがまんと老若男女貴賤群集地内に
駒の立とハなかりける庄屋此由御前に申上ル土佐守聞召し御喜ハ
限なしノ

(三十五ウ)

これく旅僧に使者ニハ金沢源馬頓而南蔵坊に對面主人土佐守申入
候ハノ

野根坂の変化の物御したがへ喜悅之至不過之幸かな手前祈願所
願上しやうたい致べし匱忽ながら御來臨希奉ると申けり南蔵坊

召しこは忝き仰かな愚僧あんぎや心懸大願御座候得共御免可成と
ける源馬達而申ハ忠ありさらば御暇申上帰主人江斯ト申上ル土佐守

適惜しき名僧やさらば清兵衛召也と仰ける召に頓而相詰る土佐守
ちノ

かふめしてなんじ親に孝行故に名僧を拘ひ置き野根坂ことやく

(三十六オ)

なく相鎮め喜悅不過之此證として五拾石永代取する也御判
こそハ下さるゝ有難しくと三度戴き本所を指して帰りケ様く

と申けるノ

御房有難や是と申も旅僧の御願是ハ扱置四郎三郎夫婦 弥々悪心止事なく壹人の親をせまき所に押込人の田地を切取家来者共昼夜いぢりさるなみ賣買高刑を取人に施事少茂なし先頃宿かれらんとせしどしんが野根坂の犬ヲころしたハ有難やと遠国他国の者迄も拝ミに参るいらざる銭を 費 詰ニもなれは我前に 暈丹頭ヲすり付

（三十六ウ）

てくるシかる其参殊而着て壹盃吞たらよかろふとゐらざるあいそ申ける有夜女房わつと泣さけびかつばと

起おどりあがりくるひけるは四郎三郎むつくと起て見てやれば両の耳々／

蛇出首をくるく／と引巻眼をくわつと見開しハすさまじき四郎三郎引はなさんとしたり弥く巻話無念と力を入引ければ不思議やみけんに式尺斗の角出眼くらみてはいまわるハ浅聞しけれ伴五六此由見てとうでんし日頃悪心南無三方四ら三らいかに五六清兵衛方之名僧へ参り／

（三十七オ）

此くけんすくひくれよかし金錢は何程にも構なしはやく／と申けり五六南蔵坊へ参右之段申上ル南蔵聞召し不便の次第天のなせる

罪なれば我が智恵に成難し去ながら悪心にて溜たる金錢諸人に 費 有ならむからハうかむべしと仰ける五六なく／と帰る蛇塚鬼塚とて／

今に有末世に悪名残しける南蔵亭主近付永く／逗留致し暇申さん御名残おしく候扱御参銭ハ如何致さん南蔵聞召しそれハ寺建立致し釈迦如来本尊として次二三拾三観音御佛師奉り

（三十七ウ）

信心？申よ女なからも古今稀成親孝行末世に名ヲ残しゑさ

せんと御身が名を山がう亭主の清ノ字を入我か南字ヲ加へおくら山南清寺と御自筆ニあそばし亭主ニ社ハ給はりけり有難し／と三度頂戴す南蔵さらばと暇の給ひば夫婦始所之者数百人御遣り奉夫々築前十九社築後四社豊前六社豊後六社大隅薩摩の境かた村に着見れば数百人にて一度にわつと泣くおりかゝる所に二八斗の女房涙友に來り南蔵立寄如何に女房

（三十八オ）

あれなるにあたるうれい候哉心深く神佛大切にましませ共是非なき事ハひとり子明神へみごくに上り申ニ付なげかせ給ふと語り通る南蔵／

扱ハ不便かな我心見二宿かれんと立寄曰？る一夜之宿と仰ける亭主立出／

御僧ハ何国今御出愚僧ハ奥州南部廻国＞行扱某ハ壹人之子明神へみごく／

に上り？あわれミ給ひとさめ／と泣居しそ南蔵聞召し其明神に由緒はし有けるハ去れば昔ハ野原二夜の内ニ瀉とおり人を取事数不知所之明神と祝ひ三年に一度宛みごくに上り候當寺ハ我等が伴ニみごく

（三十八ウ）

の文字みげんすきり候月廿星无壹人し子不便なり南蔵聞召しいたわしき次第也さらば加持致まいらせんとそれこなたにと仰ける女房子共を引連／

出にけるのふ御僧様我々夫婦が身の上不便者と思召偏ニ頼まいらするとさ／

め／となげがる、観念しこしん神法種の加持むじやう秘法神通

加持／

はらひたまいきよめ給ひと宝珠を以てなで給ひハみごくの文字
忽うせて南蔵坊みげんにありくとすわりしにりつかうふしきぞ有
難さはむねゝあまりて御衣にすがり付さめくとなげき居りける

(三十九才)

しさとて三拜九拜し此家之者共一度にどうでんし???しばらくなりは
鎮らずあくる日になれば祢宜神主みごくの輿に刻限遅しと
よばわれハ南蔵坊出給ひハ夫婦取付我子は助り候江共御僧様に
別れまいらす事やるせなきと倒臥て泣居たり神主是を見て
こハ思も寄らず南蔵聞召し尤也愚僧宿かれんとせし所にふしぎや
みごくの文字据り候何様明神の御取替迄見得たり是非もなし
愚僧みごくに参らんと仰ける杜人ふしぎはれず本人出し給ひと

(三十九才)

いふ其時久米之助出ければ杜人はつと手を打て目出度しくと南蔵
を輿に乗せ岩家をさしていそぎける岩家になれば輿より
おとし岩家之口にすへ置て御神樂そうし奉り夫も船に乗り
ろかいはやめて逃て行南蔵法花経誦誦してこそおはしますし
ばらく有て機尋乃大蛇みごくをくハんとかけ来りむつと扣ひてはつ
たとにらみてゐたりける我ハ汝が餌食になさんと如来の文二百佛諸行
無常法非生滅法僧生滅已?寂滅為樂と一文字に飛

(四十才)

込給ひばふしぎや口はハツにさけ八葉の蓮花と成るれんげの内々尊キ
僧之法力ニ而蛇道苦しミまのがれて辨天と現れたりとあたりをかゝや
かし立給ふ南蔵はやとふしおがみそれ分も扇をあけてまねぎ
給ひば長者迎の舟を参らせて我家にともない奉り御恙なく帰ら

せ給ふとて有難しくとおがまぬものとてなかりける其時平家の大將
清盛入道聞召し此弁天をちやふたひ奉平家の内神と敬ひ申ぞ
有難かりける次第也南蔵亭主近付給ひのふいかにかうふ人當く

(四十才)

親に孝行神佛に信心怠る事なかれさあらば暇と夫ハ国々
神社権社ふし拜ミ出羽拾壹社奥州百?壹?社西国三拾三番四国三十
三番竹生嶋三十三番坂東三拾三番日本廻国山々嶽々残なく行脚
す一其わらんじのきる、事なし夫ハ津輕松前心懸下らせ給ふ霊現
山觀世音臥拜ミ誠ニちげひしんくとして法花経ひらけて四方にくん
ずる御法御山ぞ有難けれ我暫昔の行を勤んと中段に柴の庵を
引詰法華経どくじゆまします夜ハ御 経昼ハ大般若經六百卷

(四十一才)

書納御宝座奉り今に御堂に納り有か皆とるとハ思ひ共はや三歳
の春に成にける有夜異形くんじてさんきやう輝其内に觀世音いかに
南蔵坊大願既に成就せり是ハ未申に向て嶮山難水分光汝か住
山定まるべしと御聲新にましくと御堂とてハ入給ふ南蔵かんるひ
肝にめひじ御跡三度伏拜ミ教に任せて出給ふに是ハ扱置四野崎八力ハ
心はそくも木曾路なる番場鮫具摺張峠おの、しく青墓や
樽井の宿を打過て鏡か原青野か原熊坂長範物見之松右手に

(四十一才)

はるか打詠め鳥居峠打越て麓の村に着二ける日も暮宿かれバ
やと思ひと有所に案内乞ひけれハ御宿申度候此年無左右故盗人
多く用心?敷??也やに成高く骨たくましき人おそろしく御宿を
成申さん八力聞て某ハ子細なし一夜申??女房立出見給ひ何様只人
ならず若も夜盗人いるならば落人有て給わるべし宿を参らせん八力

聞て安キ事百人弐百人ハ暫時之内追払申さん八力旅のつかれをはらさんと枕引寄ゆたかにふしける夜半に過行ハ木曾の熊沢角判

（四十二オ）

といへる夜盗人の大将？？共引れて塀を乗越大庭に忍入とぎを
取て上ける亭主徳左衛門おどろきあわて、時に大将大音上ヶ木曾
ニ隠なき熊沢／

角判と申盗人大將した―物は弐百人斗金銀さい宝残なく出せ／と
よばつ／

たり亭主猶々おどろき角判日比鬼神の如く聞及たる物命斗も助らんと
わな／／ふるひはへまわる女房八力臥たる一間に行のふ旅人様夜
盗人いり候／

御加勢有て給うわれはや盗人共蔵ヲ押破金銀を取出し其上衣裳
共にうばいとらんとどよめきて戸障子ヲ打破すでに帰らんとする所に

（四十二ウ）

八力むつくと起上り心得たりと五尺八寸の太刀横だへて縁端につと
立見れば／

すぎまじき大勢也先そつと出大門小門てうとしめ袋鼠に押しひし
がんと／

片原合はらり／／と切倒す寄ての大勢大きに驚き片原に？り入八
力もん／

につ／と立上りしばし息を継にける大将角範是を見て此内にしれも
の有／

あますなと下知すれハ打物さしかざし村々寄にける時に女房白あや
た／／んではち／

巻しめ左手に小長刀ひつさけ下女に酒もたせ旅の殿ミつから一ト働
仕る也／

勞をはらさせ給ひと酒と肴益共に指出し八力ヲ、面白し肴に一ト
合戦と／

（四十三オ）

引清／／と吞たりけん女房推参出る盗人あら出物見せんと長刀水車に
かいふつて大勢中に割テ入火花ヲちらした、かひける時もうつさぬ
其隙に／

三十六人老枕ニ切ふせたり岩家源六兵衛扱も切たる女めと鉄棒―
取のべ／

てうと打ハひうとぬけ左手へはらゐば右手へぬけ源六兵衛此由見る
よりも／

おのれいつ迄ゑひと打かくればしと、請しさつてはらえば南無三方長
刀ほつきと打おられ既に危く見ゆる所に八力はつととんで出むに
むざん／

に源六兵衛か鉄棒うはい取以テひらゐててうとつかうべみちに打

（四十三ウ）

くたぎ仁王立に立たりける大将角はんそれあますなと下知すれば八
力から／／と

打笑鬼にかな棒？たわひ今にひらゐてみせんとて大勢中に割ていり
真向打はみちんなる横にはらゐば五人十人一まくり足に障れハふみ
ころし手に障れハ取てなけこくらむりやうに討て廻れハ手元にす、
むや／

つばらつらぬきねち首人つぶでこくらむりやうに打ひしぐ角範此
由見る合も五尺三寸するとぬき我こそ木曾路にかくれなき熊沢角判
とハ我カ事也ミつからに向たものはいけてかへす事あらじ汝ハ懸引
の達者／

(四十四才)

只者ならず名をなすのれ八力からく／と打わらい我我家にかくれなき大木たをしの／

八角？んとハ我事也角判聞テ面白し娑波のいとまをとらせんと五尺三寸／

ゑひやつと八力しと、請留メひらゐて討て角範得たりと請とめいつれ上手の事成れバうけるひらゐつ追いまくつつ火花をちらし戦ひける八力た、み懸て討ければ？物太刀鏑元々ほつきとおれ指添ぬかんと飛しさる八力おかみ打にてうとうつ角範心得たりと棒の先？と取右手へねちり左手へねちり互にせり合引く鉄棒真中々ふつとねつ切

(四十四ウ)

たり角範寄りくまん尤大手をひろげてむんつとくむゑいや／とねちおふ其いきほひ山も崩る、斗也角はんそのたけ七尺五寸八力六尺五寸し、／

ふじんのいかりをなし角はんハはくだ？のちからゑひや／二あらそゐ／

共勝負ハなかりける八力如何せんともてあつかふか、る所に黒雲一村驟き／

角はんか両足つかんで引上ケたり八力たぶさをむづとしめゑひやつと引ハ首ハほつとぬけにける其時雲中ひかに八力此角範とて大六天之魔王入かわり日本をかたむけんとす危きかな我ハ汝が父

(四十五才)

八郎左衛門か亡魂也さらは／と影も形ちも成けり其時亭主喜事限り限なし四五日逗留御暇と申ける女房金子百匁御前に指出し心斗の御錢に参らせんと申ける八力金子は果なし亭主金ハ御不足無御座共此度之御おん命の親にまします巴志 之一通り請させ給ひ八力さ

らば／

申請んとおし戴き善光寺初崎村と祢山薬師？割坂下り見れば柏崎宿過れば出雲崎宿／山々打過て急くに程なく本国七崎村二着五郎左衛門夫婦に南蔵坊の行末くわしく語りける